



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	16世紀におけるネーデルラント・プロテスタントのドイツ散住:その経済史的概観
Author(s)	石坂, 昭雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 27(1), 307-349
Issue Date	1977-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31377
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(1)_P307-349.pdf



16世紀におけるネーデルラント・プロ テスタントのドイツ散住

—— その経済史的概観 ——

石 坂 昭 雄

目 次

- I 問題の所在
- II 散住の時期と規模・その出身
- III ドイツにおけるネーデルラント人宗教亡命者
 - (1) 亡命地の概観
 - (2) ネーデルラント系プロテスタントとドイツ経済
 - A 繊維工業 B 鉱山=金属精錬業 C 遠隔地間商業
- IV 結び——一つの展望——

I 問題の所在

カトリックの反宗教改革攻勢とオランダ独立戦争を中に挟む、16世紀後半の激動は、ヨーロッパ近代史における一大転換期であった。これを境にヨーロッパの経済的・文化的中心は、地中海=南ヨーロッパを去って北西ヨーロッパへ、カトリック地域からプロテスタント地域へ移動してしまい、スペイン・ポルトガル・イタリア・南ドイツ・南ネーデルラントの没落をよそに、イギリスやオランダなどがヨーロッパの政治的・経済的リーダーシップを握ることになった。ところで、この間の宗教戦争と宗教的迫害は数多くの宗教亡命者を生み出し、このことがこうした経済ならびに文化の繁栄の中心を転移させるのに大きく与っている。¹⁾とりわけ、オランダ独立戦争前後のネーデルラント人^{ドイツ系}の大散住は、それが自国ならびに移住先に及ぼした経済的・社会的影響の点で並ぶものがない程である。それは、就中、次の理由に依って

る。①、亡命者の主力が、フランドル・ブラバント・エノーなどの、当時ヨーロッパで最も高い技術と生産力を誇る、そしてその頂点には資本家の大経営すら析出していた繊維工業（とりわけ「新毛織物工業」Nieuwe Draperieや、綿工業、絹工業など）、あるいは、リエージュ＝リンブルフ地方の高度に発達した金属・鉱山業（製鉄・真鍮）の生産者や商人であったこと。即ち、彼等の散住が、ヨーロッパの各地にこれらの諸産業を移植することとなった点。②、オランダ独立戦争の過程で、当時ヨーロッパの国際商業のメトロポリスとして殷賑を誇っていたアントウェルペンが、スペイン軍の手に陥ち、多くの富裕な商人層がその資本や取引網ともども、幾つかの新しい拠点に移ったこと。このことは、これらの諸都市が、世界商業の中心として新たな興隆を遂げた重要な要因である。③、これら亡命者の圧倒的多数がプロテスタント、とりわけカルヴァン派（一部は、ルター派と、メンノー派などの再洗礼派）であったこと。とりわけ、カルヴィニストの独特の教義と教会組織、ひいては独立戦争の中で次第に形成されて来る抵抗の思想は、先に挙げた二つの点とも絡み合って、移住先に様々の強烈な衝撃を与えずにはおかなかった。

しかも、この時期ヨーロッパの宗教的勢力分布がまだ流動的であっただけに、このネーデルラント人亡命のもたらした影響も甚だ大きなものがあった。この点、同じカルヴィニストでも、ユグノーの場合と、状況が大いに異っていた。（30年戦争の終結をもって、宗教的勢力分野はほぼ確定しており、ユグノーは専らプロテスタント系の諸国にのみ入り込んだのである。）

以下、本稿において、こうしたネーデルラント宗教亡命者の移住国の一つであるドイツについて、それが及ぼした経済的影響を考察しようと試みるのは、とりわけ次の理由に基いている。それは、ドイツがネーデルラントに隣接し言語的にも——少くともフラマン系の言語は、北ドイツと同じ低地ドイツ語に属する。——、また経済・文化面でも密接な関係にあり、それゆえ、最大の移住先であったこと。しかも、ドイツでは、分立した領邦や都市が、国際情勢や内部の社会的・政治的状况に影響されながら、それぞれ独自の宗教政策を展開しつつこれら亡命者に対応したことが挙げられる。即ち、ドイ

ツは、こうした宗教亡命に関する数々の Case Study を提供してくれるのである。²⁾

とはいえ、この点に関する研究は、他の有力な亡命先——イギリス、スイス、オランダ——に比して、かなり遅れており、地域的にも年代的にも全体を展望する研究はまだ現れていない。³⁾ また、マックス・ウェーバーの問題提起との関連からすれば、これらプロテスタント亡命者の流入が18世紀後半以降のドイツ資本主義の生誕とどのような繋りを持つかが問われねばならないが、この点についても明確な見通しが立てられていない。それゆえ、目下の所は、各領邦や個々の都市毎の地方史的研究や教会史関係の史料に頼らざるを得ない。しかし、こうした個別的研究や史料の蒐集が困難であるため、本稿では、入手しえた限られた文献から取敢えず大抵の概観を試みるに止め、更に詳細な史実の解明は今後の課題としたい。⁴⁾

Ⅱ 散住の時期と規模・その出身

(1)時期、ネーデルラント人の移住の現象は、約一世紀間、3世代に亘っているが、この間に、君主ハプスブルク家（カール5世とその継承者フェリペ2世）の反宗教改革政策の進展によって、次の5つの大きな波が見られた。①1531～40年。(1535年の異端取締令 Plakaat 発布、ミュンスターでの再洗礼派蜂起とその惨敗に続く弾圧の時期。)⁵⁾②1550年代、1550年の4つの勅令、いわゆる「流血法令」Bloedplakaat による迫害、③1566～73年、偶像破壊運動 Beeldenstorm とそれに続く、ヴァラシシアンヌ Valenciennes、リール Lille、トゥルネー Tournai などのカルヴァン派の武装蜂起と敗北。そして、それに続くアルバ公の弾圧。④1584年～90年、パルマ公による南ネーデルラント再攻略、(とりわけ、1584年ガン・ブリュージュ陥落、1585年アントウェルペン開城)。⑤1620～40年。リエージュ地方の金属工業生産者のスウェーデン（ルイ・ド・ジェール Louis de Geer の誘致）やドイツ（ジャン・マリオット Jean Mariotte の誘致）への移住と、南ネーデルラントの再洗礼派コロニーの消滅。

第1期。この間に最も激しい迫害を蒙り、最も多くの犠牲者と亡命者を出したのが再洗礼派であった。カール5世は、ドイツのプロテスタント派といかなる妥協や和解に達しようとも、その直領であるネーデルラントにおいては、些かもプロテスタントを容認せず、厳しい取締りを断行した。元来、ネーデルラントでは、『新しき信仰』devotio moderna運動以来のフマニスム的改革運動の土壌が育っており、ツヴィングリーの影響下に、聖餐象徴主義 Sacramentarianisme が普及していたし、ドイツとの交流の深かった商業都市アントウェルペンの商人層の間にもルター派が伝播して行った。また、外からは、ケルンとワッセンベルク Wassenberg (クレーフエ公領内の福音主義派の拠点) から絶えず、説教師達が秘かに潜入していた。だが、厳しい追及の手を逃れるため多くの宗教改革家達がエムデン、ロンドン、バーゼル、シュトラースブルク、ケルンやクレーフエ領に亡命し、外国の宗教改革運動と交流した。こうした初期の宗教改革運動、とりわけ聖餐象徴主義の土壌に、1529～30年頃から、再洗礼派が浸透し始めたが、この教義は、時恰もヘルダー公国との戦争で海上貿易の杜絶、そして深刻な経済的危機に苦しむ北ネーデルラント (とりわけ、ホラントやフリースラント) の大衆の間に共感を得ていった。こうして、いずれ、多くのネーデルラントがミュンスターの悲劇に巻き込まれたのみか、ネーデルラント全域で、再洗礼派のみか聖餐象徴主義者の狩立てと処刑が続いた。この派の住民は相次いで北海やバルト海沿岸地方 (エムデン、ヴィスマール、ダンツィヒなど) に逃れ、やがてメンノー・シモンズ Menno Simons によってメンノー派に再組織されて行くことになる。

第二期は、カルヴァン派登場の時期に当たっている。カルヴァン派は、ジュネーヴから直接に、あるいはフランスを経由して1545年頃から南ネーデルラントのワロン地域 (フランス語系) に入り、次第に浸透しながら60年代には北ネーデルラントまで広がった。これに対して、カール5世は、1550年以降4つの勅令を發布してこれを禁圧したため、50年代に大量の亡命者 (ロンドン、フランクフルトなど) を出した。その後、60年頃からネーデルラントに

におけるカルヴィニストの地位が著しく強力となり、多くの亡命者が帰国したが、1556年の偶像破壊運動 *beeldenstorm* とそれに続くヴァランシアンヌ、リール、アウデナールデ、トゥルネーなど、フランドル南西部（およびエノーの一部）の武装蜂起敗北、そしてアルバ公の到着による大弾圧政策により形勢は一変した。こうして、直接叛乱に参加したものは勿論、多数のネーデルラント・プロテスタントが国外に脱出したし、また続いて全土を舞台として闘われた独立戦争による荒廃は、一層人口流出を惹起した。

第三のピークは、1585/90年の時期で、既に北ネーデルラントとフランドルやブラバントは、ユトレヒト同盟を結び独立を宣していたが、パルマ公アレキサンデル、ファルネーゼ Alexander Farnese を主将とするスペイン軍は、ユトレヒト同盟側の拠点を次々と奪回し、1584年のガン、ブリュージュに続き、85年には長い包囲の末アントウェルペンが開城した。また北方では、オーヴェルエイセル、フロニンゲンなどの諸州がスペイン側に占領されている。このため、再び多くの南ネーデルラント人が故郷を棄てたが、とりわけアントウェルペンの商人や手工業者（絹工業、染色業、ダイヤモンド磨き、精糖）は、オランダ各地のみならずドイツ諸都市に散って行った。¹⁾

なお、第4期については、必ずしも宗教的動機に由ってはならず、また移住者が、——とりわけドイツに関しては——プロテスタント系とは限らないので、16世紀とは区別して論ずる必要がある。²⁾

(2) 亡命の規模。この間の一世紀にわたる亡命者の総数を把握することは近似的にせよ甚だ困難である。差し当って利用可能な史料は、教会関係の文書である。これら亡命者は、移住先で自らの教会（改革派教会、一部はルター派教会）を組織したのであり、こうしたワロン系またはフラマン系教会が亡命者の大多数を掌握していたことは間違いない。だが、これら教会がネーデルラント人亡命者の総てを含んでいたわけではなかった。しかも、一定時点でのドイツやイギリス各地のこれら教会の信徒の総数をうることも不可能である。ところで、ネーデルラント系宗教亡命者達は、容易に安住の地を得られず、移住先での種々の障害が、度々彼等を再移住に——ロンドンからドイ

ツへ、あるいは、ドイツ内部での——逐いやった。このため、各地の教会の信徒数の単純な合算は、重複を招き兼ねない。第二の史料は、都市の種々の史料であり、とりわけ、市民権の取得ないしギルド新規加入者の記録は、こうした亡命者の出身地や職業を知る貴重な手掛りである。ただ、この記録を利用しうるのは、少数の都市に限られる。

なお、85/90年代にピークを迎えたネーデルラント人の亡命者は、その後、オランダ独立戦争の勝利とともに、還流——北ネーデルラント人のみならず、南ネーデルラント人も——し始めるし、この移動は、17世紀に入って、オランダが目覚ましい繁栄をとげる一方、ドイツが30年戦争で荒廃するにつれて、ますます激しくなる。従って、16世紀に亡命したネーデルラント人が、どれだけドイツに留ったかも検討する必要がある。

さて、全体として、古い文献は、こうした亡命者の総数を30～50万と見積っていた。たとえば、ネーデルラント人の亡命者の教会に関する先駆的研究を行ったファン・スヘルフェン A. A. van Schelven は、北ネーデルラントへ移住した南ネーデルラント人のみで50万に達するものと見ており、オランダの経済史家ファン・ディレン Van Dillen も、この数字を継承している。この他、コルニュ F. Le Cornu、メイホフファー J. Meyhoffer、ボルフフラーヴェ Borchgrave、ドゥ・ビュルビュール A. de Burbure、ラ・フォンテーヌ La Fontaine などの推計も30～50万という数字になっている。しかし、これらの数字は、当時の南ネーデルラントの人口約100万と比して明らかに過大である。それゆえ、戦後の諸研究においては、これら移住者数は、5～10万と評価されている。たとえば、エミール・レオナルド Émile G. Léonard は、その主著 *Histoire Générale du Protestantisme* で、アルバ時代のみで、イギリスやドイツに亡命したものを10万とし、ペーレマンス H. Pele-mans の修士論文も1567～73年についてこれを5万と見る。そして1952年に出版された通史 *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, V において、この問題を扱ったファン・ハウテ教授 J. A. van Houtte は、もっとも低目の数字を提示する。即ち、南ネーデルラントから北ネーデルラント（オ

ランダ)へ移住したものの数は5.5万で、この他国外へは4万(うち3万が南の出身)で、うち2万は外国に永住した。この他、アントウェルペン陥落後、北へ移ったものを1万人とすれば、その総計は8万5千となる。これは、南の総人口の10%弱にも及ぶ。もっとも、この数字に対しては、これを過少とする批判もあり、目下の所、³⁾確定は難しい。

(3) 出身。これら亡命者の出身地や社会層を確定することも、著しく困難であるが、移住先の諸都市の記録や、ネーデルラント側の断片的史実からして、次の点は確認しえよう。

先ず、移住者の中核であるカルヴィニストについては、手工業者ならびに商人が圧倒的に多く、農民の亡命は殆んど見られなかった。従って、その移住先は、商工業の中心地、とりわけ都市にあった。とりわけ、1566年の蜂起の中心地帯は、西南フランドルの農村毛織物工業地帯、ならびにリール、ヴァランシアンヌ、トゥルネー、アウデナールデなどの都市であり、敗北後、これらの地帯から、商人層、あるいは、毛織物、綿・麻織物、絹織物の生産者が亡命している。この点は、フランクフルトやヴェーゼルにおける市民権⁴⁾取得者の職業からも明日に窺われる。(付表ⅡA.B.C. ⅢA.B 参照)。これと並ぶ源泉が、すでに度々述べたように、アントウェルペンであった。この国際的商業都市には、早くからルター派が伝わったが、他方でカルヴァン派もここに強力な拠点を築いていた。この他、南欧貿易によって、多くのユダヤ人(改宗ユダヤ人=マラノス)も、多数ここを本拠にしていた。これらプロテスタント系商人や、ダイヤモンド磨き、精糖、毛織物染色=仕上、絹織物などの職人が、大量亡命を行うことになるが、注意すべきことは、アントウェルペンから移住した商人層は必ずしもプロテスタントとは限らなかったことである。当時、アントウェルペンをその本拠としながら南欧貿易を営んで来たポルトガル商人は、居留民団 *natie* としてケルンに移り、またイタリア商人もこれに倣っている。しかし彼等は依然として忠実なカトリックで、宗的理由よりも、アントウェルペンの経済的地位に対する不安から移住したもののと思われる。この点は、ケルンに移ったネーデルラント系のカトリック商

人についても同じことがいえる。⁵⁾

一方、北ネーデルラントからの亡命者については、詳しいことは不明であるが、独立戦争の初期には、カルヴァン派は北で殆んど勢力をもっておらず、亡命者もそれ程多くはなかったであろう。但し、最後までスペイン＝カトリック側に忠実であったアムステルダムなど幾つかの都市では、有力な市民（船主や商人）が亡命しているし、また独立戦争のさ中にスペイン側に占領されたフロニゲンでもカルヴァン派の国外脱出が起きた。このように、北ネーデルラントの亡命者の多くは、ホラント、フリースラントの再洗礼派であるが、その殆どは、船員・漁民・商人など、海運や貿易の関係者が多かったと思われる。そして、後にプロイセンに多数の農民も入植している。⁶⁾

Ⅲ ドイツにおけるネーデルラント人宗教亡命者

(1) 亡命地の概観

次に、移住先であるドイツの側から、その流入の実態と、影響を考察することとしたいが、それに先立って、全体としての移住地の分布を確認しておきたい。(彼等の移住は、当然、従来からの文化的・経済的交流の経路に沿っているのであり、逆に16世紀におけるネーデルラントとドイツとの交流の痕を明らかにしてもくれよう。)

ところで、彼等の移住の流れは、大きく二つに分けられる。(もちろん、両者相互の交流も活発であったが。)第1は、ライン地方であり、北は国境を接するクレーフェ公国から、ライン河を溯って遙かスイスのバーゼルに達する。第2は、隣りのオスト・フリースラント伯領から、ハンプルク、ホルシュタインを経て、ダンツィヒ、ポーランド、そしてオスト・プロイセンに及ぶ、北海・バルト海沿岸である。この他、ライプツィヒやニュルンベルクなどの商業都市や一、二の領邦への散発的移住も認められる。¹⁾

A、ライン地方。ライン地方における最も重要な移住先は、クレーフェ公国 Herzogtum Kleve で、幾つかの都市にネーデルラント人の集団居留地が形作られていた。この中でも、ライン地方における、ひいてはエムデンと並

んで全ドイツのカルヴァン派の最大の拠点となり、種々の新工業や商業の移植についても重要な役割を果たしたのが、「小アントウェルペン」Klein-Antwerpen とさえ称せられたヴェーゼル Wesel で、70年代には、7～8000のネーデルラント亡命者を数えた。その出身地と職業は、全体については不詳であるが、極く少数の出身地の判明している亡命者については、南北ネーデルラント半々であり、付表ⅢAに見られるように、ほとんど全域を網羅している。またそのうち、約半数が繊維工業関係の手工業者、¹⁾強が商人である。

(ⅢB) この他幾つかの小都市にもネーデルラント人のコロニーと改革派教会が生れている。先ず、毛織物工業都市ゴッホ Goch には、1540～60年代から流入が始まったと見られ、ガン、アントウェルペン、テュルンハウト Turnhout、ス・ヘルトヘンボス 's-Hertogenbosch、フラーヴェ Grave、ドルトレヒト Dordrecht などの新毛織物工業関係を中心に、1570～80年代には2500人を数え、1570年には、正式の教会規約 Ordonnantien der gemeinten godes が作成された。この他、ヴェルナー・ジーマンズの挙げる所によれば、エメリッヒ Emmerich (1570～80年頃2000)、レース Rees、ヘネップ Gennep (現オランダ領)、クレーフエ Kleve、カルカール Kalkar、デュースブルク Duisburg (2500人、1554年以降)、クサンテン Xanten などにも、居留地が形成されている。なお、ゴッホ・ヘネップ・レース・カルカールなどには、カルヴァン派の以前から、再洗礼派(メンノー派)がコロニーを成していたが、ネーデルラント系がこれに加っていたかどうか、カルヴァン派(改革派)にどのような影響を及ぼしたかは不明である。なお、領邦君主たるクレフエ公(マルク伯 Mark、ユーリッヒ公 Jülich、ベルク公 Berg を兼ねる)は、カトリックを離れず、67年以降、アルバ公の圧力を受けて、カルヴァン派に追放令を出すなど、ネーデルラント系亡命者に決して好意的ではなかったし、1609年にはクサンテンにイエズス会の修道院が設けられるなど反宗教改革攻勢も厳しかった。²⁾

このクレーフエ国に隣接した小邦、メールス伯領 Grafschaft Moers (Mörs bzw. Meurs) は、後にドイツ最大の絹織物工業都市となったクレフェルト

Krefeld を含むだけに注目に価する。恐らく16世紀にも、領邦君主（ノイエナール伯ヴィルヘルム3世 Wilhelm III von Neuenahr）の採った宗教的寛容政策により、ネーデルラント系プロテスタントの流入が見られたものと思われるが、その正確な数は不明である。君主ヴィルヘルム3世は、この後、ケルン大司教とノイス Neuß をめぐって争い、遂に1586年にスペイン軍にこの邦を占領された。そして、この邦のカトリック化が断行された。この後、この地は、遺贈によって、オラニエ家が1594年に相続し、1597年にスペイン軍を放逐したオランダ連邦軍がここを占領した。こうして、ユーリッヒ＝ベルク継承戦争や、ユーリッヒ＝ベルクの新君主、プファルツ＝ノイブルク Pfalz-Neuburg 家による領内再洗礼派の迫害を逃れた人々は、オラニエ公によって宗教的寛容が認められていたこの領内に集まって来たのであり、こうした第二次的移住を通じてクレーフェルトが、17世紀後半から次第に重要な中心地として成長を遂げて行く。³⁾

これら領邦と並んで重要な移住地となったのは、ライン中流の帝国都市、ケルン、アーヘン、フランクフルト・アム・マインである。カトリック派の牙城であって商業都市ケルンには、アントウェルペンのポルトガル商人やイタリア商人（1574年以降）やカトリック系を中心とするネーデルラント商人の移住が見られたのみならず、市当局は、その商業の復興のために敢えてカルヴァン派の手工業者（新毛織物や絹織物）の亡命をも認めた。そしてこうしたカルヴィニスト＝手工業者層の居住は、ケルンに様々の社会的＝経済的対立を喚起することとなる。同じく、ネーデルラントに境を接するアーヘン Aachen も、隣接したリエージュやリンブルフのみならず、フランドルなどの毛織物工業の生産者や商人あるいはアントウェルペンの商人（約4000人20%）を迎入れ、次第にカルヴァン派の勢力がカトリックに迫って行く。一方、ルター派の帝国都市フランクフルト・アム・マインも、南ネーデルラント各地の新毛織物あるいは絹織物の生産者のみならず、アントウェルペンから多数の富裕なルター派商人を迎えて、1585年以降、「ベルギー系移住都市としての、フランクフルトの第2繁栄期」Frankfurts zweite Blütezeit als belgische

Kolonialstadt を築いた。⁴⁾

この他、アイフェル台地 Eifel 鉄工業地帯のマンドルシャイト伯領 Grafschaft Mandelscheidt あるいは、シュトルベルク Stolberg (ユーリッヒ領) やコルネリミュンスター修道院領 Abtei Cornelimünster の菱亜鉛鉱業や真鍮工業地帯も、ネーデルラント系カルヴィニストのブールとなった。⁵⁾

最後に、ライン地方の幾つかのカルヴァン派領邦を欠かすことができない。中でも1559年からカルヴァン派に移行したクーア・プファルツ Kur-Pfalzは、同派のドイツ最有力の領邦となり、首都ハイデルベルクに多くのネーデルラント人を迎え入れたが、選帝侯フリードリッヒ3世 Kurfürst Friedrich von Pfalz と次のヨーハン・カジミール Johann Casimir は、没収した修道院所領にネーデルラント系植民都市を建設して新毛織物工業の移植を計った。こうして、フランケンタール Frankenthal (1562)、シェーナウ Schönaue (1562)、ランプレヒト Lambrecht (1568)、オッテルブルク Otterburg (1579) が次々に誕生し、フランケンタールとシェーナウは、一応毛織物工業地として名を知られるに到った。次いで、ヨーハン・カジミールは、商業的拠点として、ネッカーとラインの合流点に、1605年新都市マンハイム Mannheim を建設(30年戦争で破壊の後51年再建)し、ここをツンフト規制の全くない自由な商工業都市に育て、オランダの商業の先進基地としようとして試みている。⁶⁾ またハーナウ伯領 Grafschaft Hanau も、1596年首都に新市 Neu-Hanau を建設し、フランクフルトの宗教政策に不満を抱くネーデルラント系カルヴィニスト、とりわけ、絹織物・ビール醸造、縁飾り Posamentierei、宝石磨きなどの手工業者や商人を誘致しているし、オラニエ公ウィルレムの甥ヨーハンの所領ナッサウ伯領 Grafschaft Nassau でも1596年に、ジーガーラント Siegerland のディーツ Diez に、ヘッセン＝カッセル方伯モーリッツ Landgraf Moritz von Hessen-Kassel も1604年に絹工業生産者を迎入れている。⁷⁾

クーア・プファルツは、ネーデルラント人の亡命地としては南限に当たり、それより上流の地帯では、散発的の事例しか見当たらない。たとえば、シュトラースブルク Straßburg やプファルツブルク Pfalzburg など、エルザスの諸

都市には多少の新毛織物工業伝播の痕跡や宗教指導者の亡命が見られたにせよ、大量の移住と新産業・商業の大掛りな立地移動は生じていなかった。またスイス（バーゼル、チューリッヒ、ジュネーヴなど）の場合も、イタリアならびにフランス系が圧倒的で、ネーデルラント系は、有名なマルコ・ペレス Marco Perez（1567年にアントウェルペンからバーゼルに移住した絹・薄手毛織物商人で、バーゼルに絹工業＝絹織物取引移植を企てる）やセルヴォーテール Peter T. Servaeter（同じく68年にバーゼルに移住）を除くと殆んど見当らない。但し、30年戦争後には、フランケンタールやヴェーゼルから⁸⁾の第二次的移住により、ネーデルラント系の新工業がもたらされている。

なお、ヴェストファーレンは、宗教改革期の初期には、再洗礼派や聖餐象徴主義者達を多数迎入れていたが、1535年のミュンスター蜂起後、プロテスタント系の勢力は完全に掃蕩され、隠れ潜む再洗礼派に厳しい追及の手が伸びたから、カルヴァン派の亡命も、困難であった。

B、北海＝バルト海沿岸地域。この地域はハンザ諸都市の商業圏に属し、北ネーデルラント（ホラント、ゼーラント、フリースラント、フロニゲン）は勿論のこと、フランドル諸都市やアントウェルペンとも密接な商業上の交流を経験して来た。それゆえ、多数のプロテスタントが海路この地域に亡命し、また、一旦イギリスに逃れたネーデルラント系プロテスタントも、この地方に集団再移住を企てている。中でもネーデルラントの東隣のオスト・フリースラント伯領 Grafschaft Ostfriesland（エムデン市 Emden、レーア Leer、ノルデン Norden など）は、再洗礼派、カルヴァン派双方の有力な亡命地となった。先ず、再洗礼派は1540年代以降多数がここに逃れ、メンノー・シモンズ Menno Simons 自身もここを一つの根拠地としながら離散した再洗礼派の再建と再組織の弛まない活動が続けた。これら再洗礼派は、最初、エムデン周辺のトゥ・フェルダー 't Falder などの村落に潜んで、弾圧を逃れていた。一方、カルヴァン派は、1554年にロンドンから移って来たグループが、有名な宗教指導者ヨハネス・ア・ラスコ Johannes à Lasco に卒いられてここに教会を樹立したが、これらロンドン・グループは、その指導者の影響

により、著しくツヴィングリー的であった。その後、ネーデルラントからの亡命者は数を増し、とりわけ遠隔地貿易商人や海運業者の流入によって、エムデンは、穀物やイギリス毛織物取引の有力な中心地として勃興して行くことになる。ブレーメンには、ネーデルラント系の再洗礼派やカルヴァン派の影響が殆んど見られないのに対し、ハンブルクは、北ドイツにおけるネーデルラント系プロテスタントの最も有力な亡命先であり、そのお陰でこの都市はアムステルダムに次ぐ重要な国際商業都市に成長した。再洗礼派は、北ドイツのハンザ諸都市（ルター派のリュベック、ブレーメン、ハンブルク）からは受入れを拒否された。ロストック Rostock、シュトラールズント Stralsund の態度は、これ程厳しくはなかったとはいえ、他のハンザ諸都市からの圧力は強かった。ヴィスマール Wismar は、既に1524年から内部に再洗礼派が誕生しており、ネーデルラント系を迎えてそのコロニーが出来上ったとはいえ、ここも決して安住の地ではなかった。そこで、ネーデルラント系の再洗礼派の多くは、ホルシュタイン南部のフレーゼンブルク Fresenburg（ハンブルクとオルデスロー Oldesloe の中間）に潜伏し、メンノー・シモンズも度々ここに足を運んだ。後、ホルシュタイン公国の君主を兼ねるデンマーク王クリスチャン1世 Christian I は、グリュックシュタット Glückstadt（1616）やフリードリッヒシュタット Friedrichstadt（1623）などの新都市建設に当ってこれら再洗礼派を誘致し、またシャウエンブルク伯エルンスト Ernst von Schauenburg も、ハンブルクの西隣（ピンネブルク直参領 Herrschaft Pinneburg）に新都市アルトナ Altona を建設するに当って、『大特権』 Große Freiheit を発布して信仰の自由を認めた。かくして、フレーゼンブルクのネーデルラント系再洗礼派の多くがこれら諸都市に移った。そして、とりわけアルトナは、オランダやドイツ各地からも新しい再洗礼派を迎え、ローゼン家 Roosen、ファン・デア・スミッセン家 Van der Smissen、ホーヴェルト家 Govert、ドゥ・フリーヘル家 De Vlieger などの有力商人がここを舞台に誕生し、外国貿易・海運や捕鯨・織布などによって、この都市は繁栄した。

ネーデルラントと旧くから関係の深いダンツィヒやプロイセン（ポーランド領の西プロイセン Westpreußen＝王領プロイセン Königliches Preußenと、東プロイセン Ostpreußen＝プロイセン公国 Herzogtum Preußen）にも多数のネーデルラント人が亡命しており、クーン Walter Kuhnによれば、1527～78年間に750家族に達する。先ず、プロイセン公国では、君主のアルブレヒト公Albrechtが、対ポーランド戦争で荒廃した国土の復興のため1527年と29年の二度にわたり、プロイシッシュ・ホラント管区 Amt Preußisch-Holland 東部のバルダイン Bardeyn にホラント農民を入植させ、後に若干の再洗礼派がこれに加った。しかし、これらホラント農民は乾燥した高地の開墾には不慣れであったので、この事業は失敗に終わった。そして、晩年ますます厳格なルター派に傾いたアルブレヒトは、再洗礼派禁止に向う。続いて、1556年にも、ケーニヒスベルク近くのロースガルテン Roßgarten（シェーンベルク Schönberg）に、同じ様な入植が試みられたが、新移民の多数が、再洗礼派査問の噂に怯えて、ダンツィヒ周辺のポーランド領に逃げ戻った。なお、オスト・プロイセン第一の商業都市ケーニヒスベルクも、極く少数の麻織工、石工、左官を除き、ネーデルラント亡命者を受容れた形跡はない。一方、ダンツィヒ市は、続々流入して来るネーデルラントの再洗礼派や聖餐象徵主義者に困惑しており、他のハンザ諸都市からも彼等を追放するように圧力が加えられた。このため、これらの難民は、郊外の村々の領主（クヤヴィーン司教 Bischof von Kujawien, レースラウ司教 Bischof von Leslau, とりわけノイ・シュットラント Neu-Schottland やホッペンブルッフ Hopp-enbruch）に保護されながら織布やレース編みなどの手工業に従事し、ダンツィヒのツンフトに脅威を与えた。また1547年には、ダンツィヒ市会は、冠水して放棄されたシュトゥーブラウ低地 die stublauer Niedederung にネーデルラントの亡命者を入植させている。ダンツィヒに次ぐ有力なハンザ都市エルビングにも、31年に一群の亡命者（主として聖餐象徵主義者、再洗礼派をも含む）が到着し、36年別のグループがこれに加った。しかし、これらネーデルラント人の商工業活動は、市民、とりわけ手工業者の反感を買い、ポ

ーランド王は1550年彼等の苦情を聴き入れて追放を命じている。しかし、これらネーデルラント人は、「エルビング支配領」Territorium der Stadt Elbingで、富裕な市民から借地して移り住んだ。そして、1565年エラーヴァルト Ellerwald で5つの放牧地が入植のために提供されたのを皮切りに、ノーガト川 Nogat とドラウゼン湖 Drausen-See に挟まれた低湿地デルタ地帯が、これらネーデルラント人の手で干拓されて行った。また、マリエンブルク市外の王室御料地 Die Ökonomie Marienburg にも1526年以降ネーデルラントの再洗礼派の入植が行われた。この他、ダンツィヒの南東のティーゲンホーフ地区 Tiegenhofscher Winkel やペーアヴァルト地区 Bärwaldischer Winkel の領主（1554年以降）も彼等を入植せしめているし、この成功に刺戟されて16世紀70年代からポーランド人の領主や王領地管理人・知事 Starosta などもヴィスワ河 Wisla 沿の低湿地に彼等の入植を計った。こうして、西岸のシュヴェッツ低地 Schwetzer Niederung, ザルトヴィッツ＝ノイエンブルク低地 Sartowitz-Neuenburger Niederung, ファルケナウ低地 Falkenauer Niederung, 東岸では、クルム Kulm, グラウデント Graudenz, トルン Thorn マリエンヴェルダー Marienwerder などにこれら再洗礼派が入植した。そして、次の世代は1606年にノイマルク Neumark（ブランデンブルク領）や、ブク河沿のノイドルフ低地 Werder nach Neudorf（ブレスト Brest の南方）にまでその居住地を拡げている。こうして、ネーデルラント移民は、ホルントから持込んだ技術によって低湿地を見事に草地や放牧地に変え、また酪農・果樹栽培に従事したのみか、1650年からは高地で耕地を取得し続けた。こうして彼等は、グーツヘルシャフトの支配的なプロイセンで人格的には自由な永借地農の一群をなしていた。そして、フリードリッヒ大王がポーランド分割により、ヴェスト・プロイセンを1772年にプロイセン王国に併合した際、再洗礼派は、家族を含め約1万2千（268ヶ村）を数えている。プロイセン治下で彼等は兵役を免除されてはいたものの、重い免役税を課せられ、また土地の追加取得を制限され、その経済活動に大きな制約を蒙った。このため1786年以降、一部は南ロシアのステップに移住して、ここに小麦栽培や牧羊

などの農業技術を伝えている。1914年当時、これら再洗礼派（メンノー派）のコロニーは、ドイツ・ロシア・新大陸を含めて20万を擁した。¹⁰⁾

この他には、ネーデルラント系亡命者の移住地としては、重要なものはない。たとえば、商人の移住地として、ニュルンベルクやライプツィヒが、また毛織物関係では、テューリンゲン＝ザクセンのゲラ Gera (1572)、モイゼルヴィッツ Meuselwitz (1578)、フランケンベルク Frankenberg が挙げられる他、領邦としては、ブランデンブルクのヨハヒムスタール Joachimstal (1604)¹¹⁾位の所である。

(2) ネーデルラント系プロテスタントとドイツ経済

次に視点を転じて、これらのネーデルラント系プロテスタントのもたらした種々の工業生産力が、ドイツ内でどのように展開して行ったか、また、アントウェルペン没落に伴って、ドイツの諸商業都市がどこまでその後継者となりえたのかを考察して見よう。ところで、彼等の経済的活動の中で最も重要であったのは、繊維工業（新毛織物・綿織物・絹織物など）、金属工業（真鍮・鉄工業）、ならびに遠隔地間商業＝海運業の三つであるから、それぞれについて分析を進めて行きたい。

A、繊維工業。ドイツにおける新繊維工業部門の歴史で先ず触れておかねばならないのは、アーヘンにおける毛織物工業の事例である。ここは衰退しつつあったとはいえ、ドイツで最も有力な毛織物工業都市でもあった。ここには1544年にフランドルから40名の織布工が流入したのを皮切りに、50年代からは、フランドルやリエージュ＝リンブルフの富裕な織元層が、真鍮製造者やアントウェルペンの香料商人などの大商人・金融業者などともにこの都市に亡命して来た。こうして、アーヘンでは、フランドルなどの毛織物工業地帯で形成されていた資本制生産が——そして、この亡命によって独立の手工業者は一層没落し——都市内に移し植えられたといえよう。これに対して、カトリック的な織布工ツンフト Gewandmacherambacht は、新毛織物織布工のツンフト加入を拒否し、1559年に一度はこれらカルヴィニストの追放令を市会に提案した程である。しかし、もともと、アーヘンの有力市民との繋

りを持っていたこれらネーデルラント系亡命者は、一層その結びつきを強め、1574年には遂にツンフト加入に成功した。しかも、77年からは、こうした新毛織物生産はツンフト規制からも自由になったのであった。こうして、ネーデルラント系の亡命者は二大有力ツンフトである織布工ツンフトと、真鍮製造業ツンフトで優勢となったのみではない。カルヴァン派の組織的、精力的布教活動によってその勢力は、総人口2万5千中約1万（ルター派は1000～1500）に達し、1582年には市会で多数を占めた。こうしてアーヘンの新毛織物工業は、周辺のカトリック諸領邦（リエージュ司教領、ケルン大司教領、ユーリッヒ公国）の通商路閉塞にもかかわらず繁栄し、この都市工業はフランドルの遺産を継承しうるかに思われた。だが、その後の宗教的対立、そして30年戦争の間に、アーヘンの新毛織物工業はオランダ（ライデン）やイギリスに市場を奪われ、内にはカトリック派の勝利により、ツンフト規制が強化されて行く。即ち1593年には、アーヘンは帝国勅令をドイツ皇帝より押しつけられて、カルヴァン派はギルドや市政の役職から逐われた。しかし、その勢力はなお健在で1611年にはクーデターによって市の政権を奪回した程度であった。しかし、カルヴァン派の勝利も東の間のことであり、1614年、ドイツ皇帝の要請によってスピノラ Spinola に卒いられたスペイン軍がこの市を占領してカトリックの支配を復活した。それでもカルヴァン派は、オランダの強力な後楯によってなお市中に止ることができた。とはいえ、カトリック派の手工業者達は、ツンフト規制強化とカルヴィニストの有力織元の追放を絶えず画策していたのであり、1648年ヴェストファーレン条約でカトリックの支配が国際的に承認されると、市当局も早速カルヴィニストの追放を計画する。これはオランダの介入で阻止されたもの、カルヴァン派の有力企業家元の活動の余地はますます失われ、ツンフト規制の強化により、織機台数は3台、雇職人は4人に制限されてしまう。こうして、有能な企業家達は、17世紀末から、市外の農村（ブルトシャイト修道院領 Abtei Burdscheid, ユーリッヒ領のモンシャウ Monschau, リンブルフ領のオイペン Eupen, オランダ領のヴァールス Vaals など）にその経営を移していくことになる¹²⁾。

これと対蹠的な経過を辿ったのは、ヴェーゼルの例であった。15世紀末から勃興して来たこの都市の毛織物工業は早くも20年代には衰退に向い、その経済的基盤もライン河とリップ河 Lippe を結ぶ穀物・塩・葡萄酒・毛織物などの商業にあった。それゆえ、この都市には手工業者層による新工業移植への拒絶反応がなく、ネーデルラントの手工業者に市の門を開放することによって新工業伝習の機会を得ようとしたのである。また、市当局のルター派的宗教政策に対して、一般市民は、その宗教的改革運動の最初からの伝統からして、むしろカルヴァン派に帰依して行き、遂にはカルヴァン派が市教会を吸収するにいたった。こうして、ネーデルラント人のもたらしたボンバジン織 Bombasin (麻または綿の経糸と羊毛の緯糸)、トリップ織 Trip (毛のピロードの一種)、縁飾 Posamentierei (絹) などがここに定着した。そして1545年には艶出水車 Kalandermühle がそのために設置される。但し、ヴェーゼルにおいては、トリップ織とボンバジン織にそれぞれ1545年と53年にツンフトが結成されているのである。これは、ヴェーゼルに亡命したネーデルラント人が、小生産者を中心としており、アーヘンやケルンのように有力な企業家を含んでいなかったためであろう。もっとも、この両者とも、ヴェーゼルの1453年制定の毛織物ツンフト規制をはじめ、他の中世都市の場合に比して緩やかなものであった。例えば、徒弟修業の規定はトリップについては存在せず、ボンバジンでは2年（他処での同様な修業は、3年）に過ぎない。またトリップでは、ボンバジンと異なり、市民権を取得していないものも加入を認められている。またトリップでは、外部から半製品を輸入することさえ許されていた。こうした緩やかな規制は、ネーデルラント人が故国に引揚げ、ドイツ人が主体となるにつれて強化されて行く。そして、17世紀初頭、オランダへの輸出を通じて繁栄したこれらの新繊維部門も、次第にミュンスター司教領内の他の中心地——ボホルト Bocholt, ボルケン Borken, コースフェルト Koesfeld, ヴェルデン Werden, ヴァーレンドルフ Warendorf——や、¹³⁾同じくクレーフエ領のデュースブルクの競争によって衰退して行った。

アーヘンやヴェーゼルと異なり、地元への手工業者層の激しい抵抗を受け

たのは、カトリックのケルンとルター派のフランクフルト・アム・マインという二大帝国都市の場合である。ライン地方の諸都市の中で最も頑強なカトリックの牙城であり、アントウェルペンを避難して移って来たポルトガル・イタリア系あるいはカトリック・ネーデルラント系商人の拠点であったにもかかわらず、ケルン市当局が敢えて、カルヴァン派の手工業者の亡命を許したのは、この都市の寡頭支配層である商人＝都市貴族層が、種々の新繊維工業——とりわけ絹織物工業や新毛織物・綿織物工業——の誘致を狙ったためであった。中世には、アルプス以北ではパリと並ぶ最大の絹織物工業都市であったケルンは、その後15世紀後半に入ってからドイツ（ウルムのビロード、アウグスブルクの織子 Brokat や金襴、ニュルンベルクの縞子 Atlas）や、フランス、スペイン、イタリア、とりわけネーデルラント（ガン、ブリュージュ、とりわけアントウェルペンなどの）競争に苦しみられていた。それゆえ、こうした亡命者による新工業移植は、ケルンの繊維工業発展の絶好のチャンスであったが、絹織物ツunftや麻織物ツunftの手工業者や商人達は、ネーデルラント人による新技術（手動または水力撚機 Räder-und Mühlenwerk）や、1590年代から外来の商人の手で輸入されて来る増量生糸 Beschwerte Seide あるいは染色糸 gefärbte Seide の増加に激しい敵意を示した。1562年には、撚機が、製糸女工の仕事を奪うことを理由に禁止されたし、1564年に、アントウェルペンから移住して来たイタリア人のアンブロジオ・スピリタロ Ambrosio Spiritallo は、製糸・仕上・染色を含めて、2台の水力設備の使用をケルン市から認められたが、67年その許可を取消された。また、「イタリア流」の新しい仕上＝染色法を、市民の子弟にも伝授することを条件に許された、ヨーハン・デュザール Johann Dusart は、それにもかかわらず1594年にツunft側の臨検でその仕事場から48ポンドの生糸と釜を没収された。そして、1594年に決定された新絹業規制 Neue Seidordnung によって、この種の器械の使用がツunft構成員と否とを問わず認められたものの、染色と仕上の兼業を防止するため、染色は2～3人の公認業者に限られ、市外に水力作業場や染色所を設けることも禁止された。また、増量生糸の使

用も禁止された他、幾つかの新製品、絹紐・縫糸・縁飾などが絹業ツンフト¹⁴⁾の管轄下に編入された。このような規制強化は、結局、大企業家達の退去、とりわけフランクフルトへの移住を招いたのである。また新毛織物・綿織物工業でも、世紀末からネーデルラント人とケルンの市民との軋轢が強まった。この分野では、絹業と異ってネーデルラント人は小生産者が多く、ツンフト創設には抵抗がなかった。先ず1540年頃にバルヘント・ツンフト Barchentamt が、麻織工ツンフト Leinenweber-Gaffel 所属の下部組織として認められ、1580年代に、ボンバジン・カッファ Caffa・ボラット Boratt などのツンフトも設立された。そして、1591年当時、ボンバジンおよびボラット・ツンフトの構成員 745 人の圧倒的多数はネーデルラント人であった。ケルンの手工業者達は、ネーデルラント人から新工業の伝習を期待しており、『無資格者』Leute ohne einige Qualifikation ——プロテスタントのゆえケルンの市民権を得られない——のツンフト加入を黙認して来た。しかし、世紀末から、これらネーデルラント人の競争をひしひしと感ずるようになった在来の手工業者、とりわけ麻織工ツンフトは、市会に圧力を加え、1604年には、資格審査が強化され、4年後には、厳格に励行されることになった。このように、16世紀末から、市会＝都市貴族層のネーデルラント系手工業者に対する保護政策に対立しつつ、彼等の優れた技術による競争に脅えるカトリック手工業者をバックに、このような抑圧政策を強行したのが、ケルンの反宗教改革派のリーダーである市長ハルデンラート Hardenrath である。こうして、ケルンにおいては、カトリック手工業者の敵意によって、ネーデルラント系の亡命者達は、宗教的のみならず経済的にも厳しい制約の下に置かれたのである。そして、カルヴィニズムもドイツ人市民の間に殆んど勢力をうることができなかった。その一端は、ケルンにおけるカトリック側の非常に強力かつ組織的な宣教活動（大学やドミニコ会やイエズス会による）に依っている。また、ケルンの都市貴族層が、ネーデルラント各地の大商人や都市貴族層と殆んど人的繋りを持っていなかったことも、これらネーデルラント系カルヴィニストの孤立を招いたのである。

ルター派の帝国都市フランクフルト・アム・マインには、1554年に、イギリス（サマセットシャー Somersetshire のグラストンベリー Glastonbury）から、プーレーン Valerand Poulhain に率いられた24家族のワロン人・カルヴィニストが移住したのを皮切りに、その後フランドル・エノー・アルトワを中心に、1567年まで約2000人（市の人口の13%）がここに亡命している。これら初期の亡命者の中心は、新毛織物工業の生産者であり、1559年には、ドイツで最初の「梳毛毛織物業規則」Burschidweber-Ordnungが制定されている。これは、梳毛毛織物 Bursat (Worsted) の他、呉絹 Camlot, トリップ, カッファなどのビロード織, ホントスホーテ織 Hondscotweber や、ボンバジン, バルヘントなども包含していたが、わずかに39ヶ条の簡単なものであり、製品規格（とりわけ織糸の本数）と検印を中心にしたもので、徒弟修業は、1ヶ年しか要求されていない。従って、1327年のフランクフルトの毛織物ツンフト規則、あるいはシュトラースブルクの1551年の規則に見られる生産高に関する制限や織機台数の制限も課していなかった。また、賃仕事 Lohnarbeit も——シュトラースブルクと異なり、——これを公認している。このように、新毛織物工業の生産者達の地位が公認されたのは、フランクフルトの旧毛織物工業が15世紀末にはすっかり衰退していたためであろう。だが、フランクフルトの新毛織物工業も、結局成功を見ずに潰えてしまう。それは、原料として最適のヘッセン産羊毛が得にくかった上に、ネーデルラント産あるいはイギリス毛織物——ここは、メアリー女王時代、イギリス人プロテスタントの亡命地であった——の競争に苦しめられたためであり、ツンフト側も、検印税の負担の重いことに苦情を述べている。こうして、フランクフルトでの毛織物生産に希望を失ったこれらネーデルラント人達は、1562年に、フランケンタールなどのプファルツ領に退散してしまっ¹⁶⁾た。その後70年代、再び流入が始まり、とりわけ85年以降アントウェルペンから多数が来住した結果、ネーデルラント人は4000人（20%）に達した。この時期のネーデルラント人がもたらした新産業は、アントウェルペン、トゥルナー、ヴァランシアンヌ、リール、トゥルコワン Tourcoing などの絹織物業であり、

新毛織物工業と異なって、多数の有力な企業家を含んでいた。この絹織物工業は、フランクフルトでは、全く新しい工業であり、60年代末からツンフトの枠外で営まれていた。市当局が、79年以降これをツンフトに編成し、種々の規則を判定したのは、消費税徴収の便を計るためであって、細かい規則は課せられなかった。従って、水車などの器械の利用、兼営、婦女子労働の利用も殆んど制限がなかった。それゆえ、この市は、ケルンからも有力な企業家をも吸収しえたのである。¹⁷⁾

但し、フランクフルトでも、カルヴィニストは、たとえ市民権を与えられても宗教的には無権利の俤に留め置かれ、ルター派の市民達、とりわけ手工業者の反感に囲まれていた。そしてルター派の牧師達は、手工業者に絶えずネーデルラント人への敵意を煽っていた。この宗教的——そして、同時に手工業者の経済的反感にも結びついていた——対立は、この帝国都市が周囲をカルヴァン派の有力領邦に取囲まれていただけに、一層尖鋭なものになった。こうした中で、経済的利益のために敢えて寛容政策を採り続けて来た都市貴族の自由派の勢力は後退し、カルヴァン派への圧迫が強められた。こうして1596年、これまで黙認されていたカルヴァン派の教会開設（公然たる礼拝）が禁止され、これに不満を抱く一部のカルヴィニスト（主としてトゥルネーやヴァランシアンヌ出身者）は、隣邦の首府ハーナウに、新市 Die Neustadt Hanau od. Neu-Hanau を建設し、約2000人がここに移った。（もっとも商人にとってはフランクフルトの商業的便宜は捨て難く、17世紀に入ってから、¹⁸⁾帰還したものも多い。）

こうして、フランクフルトを退散したネーデルラント人カルヴィニストにより、プファルツの諸コロニーやノイ・ハーナウに新毛織物工業や、絹工業・綿工業が移植され、これらの中心地も、やがて、ツンフト規制を制定するにいたる。（シェーナウ1584年、フランケンタール、1585年に暫定サーイ・グログレン規則 Provisorische Sayen-und Grobgrün-Ordnung, 90年制式化、ノイ・ハーナウ、1613年にトリップ・グログレン規則）そして、フランケンタールのサーイは、17世紀初頭にケルンやフランクフルトの商人の手で遠隔

地市場に進出していた。その後、この地の生産者達は、戦禍を避けてノイ・ハーナウに集まり、これまでの主産業である縁飾に加えて、呉綯 Camlot 製造¹⁹⁾をもたらしした。

この他、ハンブルクでは、1569年、市当局がアムステルダム出身のトリップ織企業家ローデンボルフ Hermann Rodenborch とガンケン H. Gancken と協定を結んでその導入を計っており、その後も種々の新毛織物工業の生産者が流入している。ハンブルクでは、ツンフトの規制は、ケルンやフランクフルトに比し硬直的ではなかったから、ネーデルラント人のみならずドイツ人も、ツンフト内で新技術や新しい経営方式を自由に活用できた。これに対して、ブレーメンでは、これらの新毛織物工業が、1589年からツンフトの厳格な規制下に置かれていたようである。だが、結局ハンブルクもブレーメンも、新毛織物工業が本格的に発展した形跡は見当らない。²⁰⁾

B, 鉱山＝金属精錬業、南ネーデルラントのミューズ川流域には、中世以来、種々の金属精錬業や加工業（ディナン Dinant などの銅器製造、リンブルフ地方の真鍮・菱亜鉛 Galmei・鉛鉱業、リエージュ＝ナミュールの製鉄業）が繁栄しており、すでに15世紀後半から、幾人かの企業家がアーヘン（ファン・デア・カンメン Van der Kammen, モンマ Momma, アミア Amya, ビーダ Byda, ルーラント Ruland）あるいはアイフェル山地（ゴエ Goé 出身のプンツゲン Puntzgen, 1464年）に來住しているが、宗教改革期にこの地方にカルヴァン派が浸透し、その取締りは、更に多くの有力な真鍮製造業者 Kupfermeister をアーヘンに亡命せしめたり、またアントウェルペンなどの遠隔地からも、銅・真鍮取引の中心地であるこの地に、銅商人や製造業者が集まって来る。そして、これらの亡命者達は、ツンフト加入を認められ、地元の幾人かの真鍮製造業者達とともに、カルヴァン派の強力な一翼を形成している。これら亡命者——la Blanche, Baumhewer, Blanchetest, Brull, Buirette, von Eden. Fellinger, Fremery, von Gansepoel, Hoesch, Japin, Melis, Nysset, Pillera, von Ruef, Seulin, Stuppert——の中で、最も高名で、現代まで続くのはヘッシュ家 Die Hoesch である。リンブルク公領ヴァ

ルホルン Walhorn の土地所有者で、アルテンベルク Altenberg の菱亜鉛山所有者であったレナルト・ヘッシュ Lenart は、1561年以来アーヘンに移り、市民権を得ていたが、スペインによる財産没収を逃れるため、リンブルクの財産を殆んど手放している。後、彼はフランケンタールに移り、この他のネーデルラント改革派教会の建築を請負っているが、82年にアーヘンに戻る。その子イエレミアス Jeremias (1568~1643) は、1612年市外のシュトルベルクにその真鍮・銅工業企業を移し、この地の工業の創設者の一人となしたし、更に、その子イエレミアス (1610~53) は、フィヒト川流域の製鉄・鉄工業に手を伸ばす。こうして、この一族は、18世紀を通じて、シェラー Schoeller, シュライヘル Schleicher 家とも婚姻を結びながら、アイフェル山地やフィヒト河谷の鉄工業、デュレーンの製紙業にも進出して行くのである。

この他、アイフェル山地では、ルニエ・ラトロ Renier Ratlo (旧リンブルフ市長)、ジャン・パンス Jean Panne, ゲルラッハ・ラーデマーケル Gerlach Rademaker が、領邦君主のマンデルシャイト＝ブランケンハイム＝ゲロールシュタイン伯 Graf Gerhard Hans von Manderscheidt-Blankenheim-Gerolstein から製鉄所および鋳鉄所の経営を請負っている。²¹⁾

C. 遠隔地間商業、ネーデルラント系商人の移住地として最も名高く、アントウェルペンの後継都市の一つに数えられたのは、ハンブルクとフランクフルトであり、またケルンも、一時期ネーデルラント系商人の有力な拠点でもあった。またエムデンもこれには劣るが、ドイツにおけるカルヴァン派の拠点となり、その勃興を彼等の来住に少なからず負っている。

ハンブルクは、16世紀後半から、リュベックを凌ぐハンザ圏第一の商業都市に成長し、ドイツ各地、スペイン、イタリア、ポルトガルやネーデルラントの商人達を多数吸収したが、とりわけ重要であったのは、南ネーデルラント人であった。そしてその数は、世紀の交には約2000人(5%)に達している。この中には、新毛織物や精糖業の生産者も含まれていたとはいえ、最も有力な移住者は、アントウェルペン系の商人達であった。たとえば、1619年に開設されたハンブルク貸付＝振替銀行 Die Hamburger Wechsel-und Lehnbank

の最初の預金者、10万マルク以上の大口は42名を数えるが、うち30名をこれらアントウェルペン系が占めている。中でも、首位のアムシンク Amsinck は、64万（翌年80万）と群を抜いている。この他、南ネーデルラント＝アーヘン地区の銅・真鍮工業の製造業者、あるいは毛織物工業地帯（ボワ・ル・デュク Bois-le-duc, ムースクロン Mouscron, アート Aath）などの商人が付加わる。これらの南ネーデルラント系商人は、総て——マティーゼン家 Mathiesen やデ・マイヤー家 De Meyer などのルター派を別にすれば——カルヴァン派であり、この有力なルター派帝国都市の宗教政策からすれば、彼等の宗教的活動は相容れぬものであった。そして、毛織物商人層も、イギリスのマーチャント・アドヴェンチャラーズとの取引を維持し続けることを望み、ネーデルラント系商人に敵意を示した。だが、こうした初期の軋轢は、世紀末には解消に向う。それは、こうしたネーデルラント人の商業活動が、ハンブルクの世界商業における地位を大きく向上させるのに貢献したからである。即ち、彼等は、ケルン・フランクフルト・エムデン、あるいはアムステルダム・ロッテルダムなど、あるいはフランス・スペイン・ポルトガル・イタリア各地に散住している同国人と密接に連繋し、各地から穀物・銅・毛織物を集荷しながら、活潑なイベリア貿易を営んだが、このような新しい貿易分野では、ハンザ以来の商人ギルドの壁も殆んど妨げとはならなかった。こうして、ハンブルクでは、カルヴァン派の市民は、自己の教会を設けることは認められなかったとはいえ、隣接したアルトナやシュターデ Stade の教会に赴くことは黙認されたのである。²³⁾

ケルンは、先に述べたように、頑強にカトリックの立場を貫いたから、ここに拠点を移したネーデルラント系商人も、カトリック（または、それを装う）が多かったのであろう。先ず、イタリア貿易は、その最も重要な活動分野で、1585/90年当時、40人のネーデルラント出身——アントウェルペンからリールにいたる繊維工業地帯が多い——の商人が、ヴェネチアを主とするイタリアとの貿易を営んでいたが、1589～94年にケルンが輸入した生糸のうち、50%以上が14人のネーデルラント人の手によった。また、毛織物輸出におい

ても、ネーデルラント系はイタリア人の商人を大きく引離していた。1570～89年の間、ケルンは、ネーデルラント産毛織物の一大集散地であり、ネーデルラント系商人達は、フランクフルト、シュトラースブルク、ナウムブルク、ニュルンベルク、リンツ、ライプツィヒのメッセでこれらの商品を販売した。また、ネーデルラント系商人は、ケルンを本拠に、ハンブルク、エムデン、アントウェルペンなどを輸出基地としながら、スペイン＝ポルトガル貿易、あるいは、バルト海、北欧貿易を営んで行った。しかし、1589年を境に、ケルンでは外来商人への圧迫が強められて行く。先ず何よりも財政的理由からあらゆる取引に100分の1税100 Pfennig が課せられ、ケルンを基地とする仲継取引の大きな負担となったのみならず、これら外来商人に圧倒された地元の商人達、とりわけ香料商人 Krämer u. Spezereihändler などの敵意も激しくなっていく。こうして、ネーデルラント系商人は、80年代からフランクフルトへ去って行くのである。1594年から1631年までの間に、フランクフルトの市民権を得たケルン商人は101人を数えるが、その中には、多数の南ネーデルラント系の名を——そして最も富裕な商人達——を見出すことができる。²¹⁾

フランクフルトは、もともと多くの南ネーデルラント商人の訪れるメッセ都市であったから、多数がこの地に亡命しているが、最も多いのが、いうまでもなくアルトウェルペンで、1600年までに140人の商人が移住した。その中心は、約70人のルター派 Martinist で、彼等は、1ダースだけで、全カルヴィニストに匹敵する資産を有していたといわれる。この他、ヴァランシアンヌ、リール、トゥルナー、ガン、ブリュージュなど、フランドル・エノー、ブラバントなどの毛織物・絹織物・麻織物や羊毛などの商人達で、合計200人近くになる。彼等は殆んどがカルヴィニストであった。これらネーデルラント系商人は、次第にその資力では地元の商人を凌ぎ（付表ⅡD）、大商人層の中心は2/3（約120人）を占めるにいたった。こうして、フランクフルトは、彼等の流入によって、ドイツで最も有力なメッセ都市となり、とりわけ毛織物や羊毛・麻＝綿織物、絹織物・生糸などの取引をこの都市に確保した。（こ

れら移住商人の70%が、こうした繊維製品の取引を業務としている。)そして、ルター派商人達は、急速に地元のドイツ人市民と融合を遂げて行くことになる。²⁴⁾

最後に、ドイツにおける最大のネーデルラント人亡命者エムデンに触れておこう。既に述べたように、ネーデルラント人の流入は1540年代に始まり、54年以降は、再洗礼派とカルヴァン派が、メンソー・シモンズとヨハネス・ア・ラスコをそれぞれ指導者と仰ぎながら対抗を続けた。その後、54～57年に一つのピークを迎え、コロニーは60年代半ばで2～3000人に膨上っていたが、更にアルバの弾圧後、5000人(50%)にも達している。その後オランダ独立戦争の好転によりその多くが帰国し、その数は1000人に落ちたが、1581年にフロニゲンがスペイン軍に制圧されると、ここから150家族が亡命して来た。これらネーデルラント人の最上層は、富裕な貿易商人や海運業者 Reeder であり、隣接した北ネーデルラント各地のみならず、ガンなど南ネーデルラント人(主として穀物商人)をも含んでいた。彼等は、中立国の地位を利用し、また北ネーデルラント諸都市とも連繫しながら、バルト海＝西・南ヨーロッパ貿易を活潑に営んでいた他、ヴェストファーレン向穀物取引、イギリス毛織物輸入などの新しい貿易を展開した。一方、ネーデルラント系の手工業者——染色工、仕上工、織布工——は、地元の手工業者達とトラブルを起すことなく定住することができた。それは、こうした手工業の分野は、既存のツンフトと競合せず、殆んど規制もなかったからである。しかも、ネーデルラント人の手工業関係者の間には、フランクフルトやケルンの場合のような大企業家は見られず、彼等はツンフトに加入してその有力な一員となった。こうして、エムデンでは、ネーデルラント人＝カルヴァン派が、殆んど摩擦を惹起すことなく旧市民と融合を遂げた。そして、オランダ独立戦争を通じて、政治的抵抗の精神を身につけたネーデルラント系カルヴァン派(メンゾー・アルティンク Menso Alting を指導者とする)は、ルター派に傾むき、スペインにも宥和政策を取らんとする領邦君主エドツァルト伯 Edzard II の教会＝外交政策に反抗し、1595年の反乱により、エムデン市は伯

の支配を覆えし（エムデン革命 Emdener Revolution）、領邦教会からエムデン²⁵⁾のカルヴァン派教会を分離独立せしめたのである。

Ⅳ 結び —— 1つの展望 ——

以上の簡単な概観から、16世紀におけるネーデルラント・プロテスタントのドイツ流入がもたらした経済的帰結について、一応の展望を述べておきたい。

先ず、亡命者の三つの源泉の一つである、アントウェルペン出身者を中心とする商人層（一部はルター派、そして少数のカトリックを含む）の移住が、幾つかの商業都市の目覚しい興隆の原因であったことは誰しも否定しえぬ所であろう。とりわけハンプルクは、後にアムステルダムに大きく引離されるにせよ、これを境にリュベックに代ってドイツ第一の海港都市にのし上がることができた。またフランクフルトも、これらネーデルラント系商人の来住によって、毛織物・絹織物をはじめとする国際商業に有力な地歩を築くにいった。また、エムデンも、アムステルダムやハンプルクに従属していたとはいえ、海運業やエムス川上流との商業によって繁栄して行った。そして、北ドイツ農村に隠れ住んでいたネーデルラント系再洗礼派も、17世紀にはエムデンやアルтна、グリュックシュタットなどの海港都市に集まり、貿易に従事した。

これに対して、工業における影響は、かなり複雑であり、後のドイツ資本主義形成との関連も、幾つかの媒介を必要としている。第1に注目すべきことは、これらネーデルラント人のもたらした「新毛織物工業」自体は、結局はドイツに定着することなく終ったことである。その原因の一つは、いうまでもなく、彼等の亡命先が都市であったため、結局は「現地の手工業ツンプトから激しい反撥と政治的・宗教的圧迫を蒙ったことを挙げねばならない。彼等が、何故、これら特権都市を避けて、農村、とりわけ農村工業地帯に入り込まなかったか、この点に関する答は決して単純ではない。恐らく領邦君主の支配下にある農村に比して、都市、とりわけ帝国都市の方が安全な避難

場所であったものと考えられるし、これらの諸工業が、外国市場に大きく依存する輸出工業であったことも、その一因に挙げられる。この点で、南ネーデルラント側の「農村」工業ないし「都市」工業の性格も、検討を加える必要があるだろうし、またイギリスやオランダ、スイスの場合とも比較して行かねばならない。²⁾なお、この点に関して興味深い事例がクーア・プファルツであり、このカルヴァン派の領邦には、フランケンタールやシェーナウの如き農村毛織物工業コロニーが建設されたが、ここでは最初自由な農村工業として出発したにもかかわらず、後に、——むしろ領邦君主の意に反して——、フランドルのホントスホーテなどの農村工業の中心地の諸規制はもちろんのこと、オランダのライデンの場合をも凌ぐ厳格な規制が作られたことである。これは、フランケンタールなどのコロニーが、大企業家を含め小生産者層を主体としていたことによるのであろう。こうして、新毛織物——種々の薄手の梳毛毛織物——は、そのままの形ではドイツに根をおろすことができず、ドイツは世界商業における最も重要な工業製品を失ったことになる。

ボンバジンやバルヘントなど半麻の新製品の方は、ヴェーゼル、アーヘン、フランケンタールなどに導入されたものの、これら中心地は、結局はこれらの新工業を育成できずに終わった。(但し、農村麻織物工業の中にこの技術は、細々と継承されて行くことになろう。)

従って、絹工業のみが、ケルンやフランクフルトなどの都市内に——そして資本制生産を含みつつ——展開しえたのであったが、この絹工業は、やがては、クレーフェルトやヴッパータールなどの農村工業に承継がれて、絹に止らず、綿工業の発展にも、そして染色業の発展にも大きく貢献することになる。

次に金属・鉱山業においては、南ネーデルラント系の企業家層は、アーヘンやその周辺のシュトルベルク、コルネリミュンスターなどの銅・真鍮工業、あるいはアイフェル台地の製鉄業の発展に貢献し、ライン右岸の鉄器製造業地帯 *Kleineisenindustrie* とともに——同じくカルヴァン派である——交流しな

がら、産業革命期にもヘッシュ Hoesch などの有名な企業家を生み出している。

従って、これらネーデルラント系プロテスタントがドイツ工業の発展に与えた影響は、直接的にはそれほど大きなものではなかったし、ヴェーゼルやフランケンタールなどのネーデルラント系カルヴィニストのコロニーも、有力な工業都市に成長しえなかった。しかし、間接的には、ドイツ資本主義の生成とは大きな関わりを持っていることを否定するものではない。それは、これらネーデルラント系カルヴィニストの流入が、ライン地方に強力なカルヴァン派の核を作り上げたことであり、ネーデルラント人は、次第にドイツ人のカルヴィニストと融合を遂げて行く。そして、ライン地方のカルヴァン派教会は、教会会議 Synod ないし小教会会議 Klasse を通じて弱小な教会に牧師派遣などの援助を行いながら、種々の圧迫に耐え、再洗礼派をも次第に吸収していったのである。³⁾そして、ルター派に対しても強い影響を及ぼしている。このようなカルヴァン派の少数集団は、やがて30年戦後の復興過程で、経済的にすっかり衰退し、また反動的に規制を強化した都市を去って、農村工業地帯で、工業経営に乗出して行ったのである。⁴⁾また時を同じくして、ライン地方で迫害を受けた再洗礼派（メンノー派）——ネーデルラント系を含む——は、宗教的寛容が保証されているメールス伯領のクレーフェルトに集まり、彼等のもたらした絹織物工業によってこの一帯は、ドイツで最も有力な繊維工業地帯に成長して行くことになる。

《注》

I

- 1) この時代には、他に幾つかの大規模な宗教的亡命者の集団が見られる。i, フランスのカルヴィニスト（主としてスイスやエルザスへ）、ii, カトリック異端審問の嵐が最も激しく吹きすさんだ北イタリア——とりわけスペイン王の統治下にあったミラノ公国（ミラノ・コモ）、ルッカなどの絹・綿・毛織物の生産者や商人で、主としてスイスへ——、iii, 同じく異端審問に脅えたポルトガル＝スペイン系改宗ユダヤ人（マラノス Marranos）、などあり、いずれも、種々の工業や貿易・金融業の立地移動に大きな役割を果たした。なお、イングランドからも、宗教亡命者——メアリー女王時代のプロテスタント Marian Exile やピューリタンの一部——

が大陸に逃れ出ているが、数の上でも経済的影響も決して大きなものではなかった。

- 2) ここでいうネーデルラント（ハブスブルク家領の17州および、リエージュ司教領やスタヴロー＝マルメディ Stavelot-Malmédy 修道院領、ブイヨン Bouillon、カンブレー Cambrai 司教領。今日のベネルックスに北フランスのノール県を加えたものにほぼ相当する。）とドイツの領界は、今日と多少ずれており、上ゲルデルン Oder-Geldern は当時ネーデルラント領、逆にオランダのヘネップ Gennepe はドイツ（クレーフエ）領であった。ネーデルラントの大部分（フリースラントを除く）は北ドイツと同じ低地ドイツ語（一部は中部ドイツ語）圏に属しており、ドイツの隣接地帯との文化的交流は緊密であった。これに対して、南ネーデルラントの南部のワロン語（フランス語方言）の地域からドイツに亡命した人々は、全く異質の文化圏の中に飛び込んだことになる。そして、彼等は、多くの場合、フラマン＝低地ドイツ語系とは別個のワロン系教会を亡命先で建設している。
- 3) この問題を全体として扱った研究としては、旧くは、G. Witzel, "Gewerbegeschichtliche Studien zur niederländischen Einwanderung in Deutschland im 16. Jahrhundert", *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, XXIX (1910), 117—181, 419—451 があるが、その扱っているのは、フランクフルト・ケルンの二都市に限られている。比較的最近では W. Kuhn, "Die niederländisch-norddeutschen Siedlungsbewegungen des 16. und 17. Jahrhunderts", *Geschichtliche Landeskunde und Universalgeschichte. Festgabe für Hermann Aubin* (Hamburg, 1950), 241—57. が、一応の展望を与えてくれる。また、W. Simons, *Die Einwanderung niederländischer Religionsflüchtlinge im 16. Jahrhundert an den Niederrhein und ihre Bedeutung für das Wirtschaftsleben, besonders für das niederrheinische Textilgewerbe* (Unveröffentlichte Diss. Köln, 1939) や、P. Koch, *Der Einfluß des Calvinismus und des Mennonitentums auf die niederrheinische Textilindustrie. Ein Beitrag zu Max Weber: "Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus"* (Krefeld, 1928, Diss. München) も、ライン地方についてこれを概観している。なお、最も新しい研究 H. Schilling, *Niederländische Exulanten im 16. Jahrhundert. Ihre Stellung im Sozialgefüge und im religiösen Leben deutscher und englischer Städte* (Schriften des Vereins für Reformationsgeschichte, nr. 187, Jrg. 78/79; Gütersloh, 1972) は、ドイツの6都市（ケルン、アーヘン、ハンブルク、フランクフルト・アム・マイン、ヴェーゼル、エムデン）とイギリスのロンドンについて、ネーデルラント人亡命者が移住先で惹き起した経済的・宗教的緊張関係を分析した興味深い研究であり、巻末の文献目録によって、これら諸都市はもちろん、ドイツの他の都市や地域、そ

してイギリスやスイスへの宗教亡命の研究状況を知ることができる。なおベルギー・オランダ側の研究も決して進んではおらず、各地の亡命者教会に関するスヘルフェンの研究 A. A. van Schelven, *De nederduitse Vluchtlingenkerken der 16 de eeuw in Engeland en Duitsland in hunne beteeckenis voor de Reformatie in de Nederlanden* ('s-Gravenhage, 1908) [未見] 以後, R. van Roosbroeck, *Emmigranten. Nederlansche vluchtlingen in Duitsland (1550—1600)*, Leuven 1968 [未見] を数えるのみである。なお J. A. van Houtte, “Het economische verval van het Zuiden”, *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, V (1952), 184—192も、この問題を詳しく扱っている。

なお、アメリカの研究 F. A. Norwood, *The Reformation Refugees as an Economic Force* (Studies in Church History, 5 ; Chicago, 1942) [これは, *The Economic Life and Influence of the Protestant Refugees in the 16 th Century*, Ph. D. Thesis, Yale, 1941) の改訂版] は、今回は参照しえなかった。

- 4) これら亡命者の大部分は、南ネーデルラントの諸邦の出身者であるが、北ネーデルラントからもかなりの数の亡命者を出している。そして、北ネーデルラント（オランダ）人は、フラマン人と一緒に低地ドイツ語教会を組織している。従って、両者を切離して取扱うことは困難であり、ここでは一括して論ずることにしたい。なお时期的には、オランダ独立戦争の一応の終結（1609年の12年休戦）までとしておきたい。もちろん、その後も、ネーデルラント人亡命者の再移動や還流があったが、その点は、必要に応じて触れるに止めたい。

II

- 1) Simons, a. a. O., S. 22—47 ; E. M. Braekman, “Problème concernant l’émigration belge aux XVII^e siècle”, *Geistige und religiöse Probleme des Zeitalters der Glaubenskämpfe in den Niederlanden und am Niederrhein* [Niederschrift über die Tagung der Arbeitsgemeinschaft über westdeutsche Landes- und Volksforschung (Bonn) in Schleiden (Eifel) vom 29 April bis 1. Mai 1936], Bonn 1963, 47—51 ; C. Krahn, *Dutch Anabaptism : Origin, Spread, Life and Thought (1450—1600)*, [Martinus-Nijhoff ; The Hague, 1968] ; L. E. Halkin en A. L. E. Verheyden, “De hervorming in het Zuiden. Staat en kerk tegenover de ketters”, *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, IV (1952), 250—263 ; A. J. Roelink, “Reformatiorische stromingen in het Noorden”, *ibid.* 264—280 ; dez., “Het Calvinisme”, *ibid.* 281—304.
- 2) cf. J. Yerneaux, *La métallurgie liégeoise et son expansion au XVII^e siècle* (Liège, 1939), Livre II.

- 3) Braekman, *op. cit.*, p. 50; J. A. van Houtte, "Het economische verval van het Zuiden", *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, V (1952), 192. 同時代の見積りによれば (1566年), 当時ネーデルラントのプロテスタントは 25 万 (10万がカルヴィニスト, 5万がルター派や再洗礼派, 10万が来住者) となっている。
- 4) Van Houtte, *a. w.*, 181; E. Coornaert, *Un centre industriel d'autrefois. La draperie-sayerie d' Hondschoote XIV^e—XVII^e siècles* (Paris, 1930), 40—3, 430—31; W. Brulez, "De opstand van het industriegebied in 1566", *Ancien Pays et Assemblée d' États*, IV (1952), 81—101. 1566年当時, リール周辺の農村工業地帯は, 圧倒的にカルヴァン派に移り, なおカトリックが支配的な純農業地帯と際立った対照をなしていた。なお, 麻織物工業地帯 (ルーセラーレ Roeseselare, クールトレー Kortrijk, アールスト Aalst, デンデルモンデ Dendermonde, ヘラルツベルヘン Geraardsbergen,あるいは, ブリュッセル, リール, アラス, ドゥエーなど) から, 多数のカルヴィニストが亡命しているが, この場合, オランダを別にすれば, ドイツよりもフランスに逃れたようである。パリには1573年当時 400 人のネーデルラント人麻織工がいたといわれるし, ブロワ Blois やブレーシュ流域 Bléche に, 壁掛織が移植されている。しかし, フランス自身が宗教戦争の唯中にあったから, 決して安住の地ではなかった。F. Sabbe, *De belgische vlasnijverheid*, I (Brugge, 1943; Werken uitgegeven door de Faculteit van de Wijsbegeerte en Letteren, 95), 311.
- 5) アントウェルペンについては, H. van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy (Fourteenth—Sixteenth Centuries)*, The Hague 1963, II, 245 ff; W. Brulez, "De diaspora der Antwerpse Kooplui op het einde van de 16 de eeuw", *Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, XV (1960), 279—306; 栗原福也「1600年前後における南ネーデルラントとイペリア貿易」(『一橋論叢』第76巻第6号, 1976年)。なお, この過程でプロテスタント貴族=領主(とりわけ, ルター派)も多数亡命しているものと考えられるが, 彼等は, ドイツにおけるネーデルラント系コロニーには全くといって良いほど参加していない。また農民も, 殆んどこの亡命に加わっていないように思われる。
- 6) これら再洗礼派は, 単に下層のみでなく, 社会のあらゆる階層を含み, 中には富裕な船主や貿易商人が含まれていた。K. H. Ludwig, *Zur Besiedlung des Weichseldeltas durch die Mennoniten. Die Siedlung der Mennoniten im Territorium der Stadt Elbing und in der Ökonomie Marienburg bis zur Übernahme der Gebiete durch Preußen 1772* (Marburg, 1961), 33.

III

- 1) 全体を展望するものとしては、Witzel, Kuhn の論文、また再洗礼派については Krahn の著書を参照。
- 2) Simons, *a. a. O.*, 75 ff ; W. Bösen, "Die niederländische Flüchtlingsgemeinde zu Goch und ihre Ordnung von 1570", *Zeitschrift des bergischen Geschichtsvereins*, XXVI (1903), 188—210.

デュースブルクでは、1578年～1612年に市民権を獲得した405名中261名の職業が判明しているが、うち半数が、麻、ボンバジン織工、染色工、毛皮製造工であった。P. Koch, *a. a. O.*, 25.

- 3) Simons, *a. a. O.*, 94 ff ; P. Koch, *a. a. O.*, 21 f. クレーフェルトへの本格的流入は、1600年以降で、確かに多くのネーデルラント系の姓がその中に多数見出される。たとえば Op den Graf (1630年頃)、Heinrich von der Leyen (1668年、ベルクの Radevormwalde より)、Scheuten, Flohe, Ter Meer, Bellen, Heesken (1694年) など。但し、もともとネーデルラントと交流の激しかったこの地方のことゆえ、これだけでは、出身地の決め手とはなりえない。なお、17世紀のクレーフェルトは、オランダとは親密な関係にあったと思われる。1683年に、この地の麻織工が、ペンシルヴェニアの German Town の入植に加わり、4つの村落の一つを Crefeld と名付けているが、これも、恐らく、Nieuw-Amsterdam 時代からの、新大陸との交流の継続であろう。

なお、P. Koch は、Mönchen-Gladbach や Rheydt, Hardt など、再洗礼派やカルヴィニスト、とりわけネーデルラント系の亡命地に数えているが、(S. 24) その詳細は明示されていない。

- 4) 後出327頁。
- 5) H. von Asten, "Religiöse und wirtschaftliche Antriebe im niederrheinischen Montangewerbe des 16. und 17. Jahrhundert", *Rheinische Vierteljahrsblätter*, XXVIII (1963), 62—83. 1593年にディートリッヒ 6 世が死ぬと、ここにも反宗教改革が持込まれるが、カルヴァン派の企業家の経済的優位のゆえにこれに耐えることができたし、1609年には Gemünd に改革派の教会が樹立された。また、Stolberg や Cornelimünster については、Klara van Eyll, *Die Kupfermeister im Stolberger Tal—Zur wirtschaftlichen Aktivität einer religiösen Minderheit* (Kölner Vorträge zur Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, Heft 17 ; Köln 1971) ; C. Bruckner, *Zur Wirtschaftsgeschichte des Regierungsbezirks Aachen* (Schriften zur Rheinisch-Westfälischen Wirtschaftsgeschichte, Bd. 16 ; Köln, 1967), 271 ff.
- 6) Kuhn, *a. a. O.*, S. 246 ; E. Gothein, *Wirtschaftsgeschichte des Schwarzwaldes und der angrenzenden Landschaften* (Straßburg, 1832), II, 675

- f. ; ders, "Mannheim im ersten Jahrhundert seines Bestehens", *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, NF., IV (1889), 129—211.
- 7) J. A. van Houtte, *a. w.*, 187; Witzel, *a. a. O.*, 132—3. ハーナウ伯領については、後述、328頁。
- 8) Coornaert, *op. cit.*, p. 41. この他、ヴォルムスやアウグスブルクも、ホントスホーテ織の伝播先として挙げられているが、その影響のほどは不明である。
- 9) W. Bodmer, *Der Einfluß der Refugianteneinwanderung von 1500—1700 auf die schweizerische Wirtschaft. Ein Beitrag zur Geschichte des Frühkapitalismus und der Textilindustrie* (Beiheft zur Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Heft 3; Zürich, 1963), 35—6, 94—5.
- 10) Krahn, *op. cit.*, 214 ff.; Ludwig, *a. a. O.*; Kuhn, *a. a. O.*, 250—1.
 聖餐象徴主義者の一部は、再洗礼派に合流したが、残りはダンツィヒのカルヴァン派に吸収された。なお、再洗礼派のフリースラント系とフラマン系は、容易に融合せず、ロシア移住の段階に漸く一体化したほどであった。
- 11) Witzel, *a. a. O.*, 131; Kuhn, *a. a. O.*, 246; H. Kellenbenz, "Unternehmertum im süddeutschen Raum zu Beginn der Neuzeit", in K. Rüdinger (Hrsg), *Gemeinsame Erbe. Prospektiven europäischer Geschichte* (München, 1959), 117. なお、マークデブルクの場合は、マンハイムの再度の戦禍の後、旧ワロン系がユグノーと共に再移住したケースに属する。ゲラ・モイゼルヴィッツ・フランケンベルクについては、W. Troeltsch, *Die Calwer Zeughandlungskompanie und ihre Arbeiter* (Jena, 1897), S. 4. が、記述史料に拠っているのみで、その実情は不明である。
 この他、ドイツにおける幾つかのカルヴァン派の中心地、たとえば、バルメン＝エルバーフェルト、ゾーリンゲン＝レネツプ、レムシャイトや、ヴェストファーレンの幾つかのカルヴァン派の領邦については、ネーデルラント人の流入の痕跡を見出すことができない。
- 12) Schilling, *a. a. O.*, 72—6; 97—101, 104—5; H. Kisch, "Das Erbe des Mittelalters. Ein Hemmnis wirtschaftlicher Entwicklung: Aachens Tuchgewerbe vor 1790", *Rheinische Vierteljahrsblätter*, XXX (1965), 253—308.
- 13) Simons, *a. a. O.*, 99 ff; Schilling, *a. a. O.*, 70—71; Z. W. Sneller, "De opkomst der Nederlandse katoenindustrie", in: *Bijdragen tot de economische Geschiedenis* (Utrecht—Antwerpen, 1968), 90—1 (original, 1926—7). スネラーは、ヴェーゼルのボンバジンを、綿・麻の交織、Barchent-Bombasin と見ているが、この点はおお検討を要する。なお、Wesel については、W. Sarmenhaus, *Die Festsetzung der niederländischen Religionsflüchtlinge im 16. Jahrhundert in Wesel und ihre Bedeutung für die wirtschaftliche Entwic-*

- klung dieser Stadt* (Diss. Kiel ; 1913) を参照できなかった。なお、トリップとボンバジンの生産の伸長は、付表Ⅲ C. ジーモンズの計算によれば、1580年のボンバジン生産は約9000反(50m平均)である。
- 14) H. Koch, *Geschichte des Seidegewerbes in Köln von 13. bis zum 18. Jahrhundert* (Schmollers Forschungen, Heft 128 ; Leipzig, 1907), 71 f. 99 f. ; Witzel, *a. a. O.*, 419 f ; Schilling, *a. a. O.*, 59 f., 110 f. ; ケルンの市当局も、繰機(手動または水力)そのものを禁止したのではなく、染色や撚糸・製糸を併せた大経営の出現を阻止しようとしたのであろう。
 - 15) 1594—1634年に、ケルンから101人の商人を迎入れているが、その中には, Johann Neef, Jakob u. Moritz von Uchelen, Sebastian Lang, Jost von Loën, 更に Benoit, Godin, von Overbeck, Malapert, Heldvier, Mattias u. Nikolaus Beydaels, Peter, Johann und Seger von dem Berghe, Thomas Brun など, ケルンのカルヴィニスト・コロニーの有力メンバーの殆んどが含まれていた。A. Dietz, *Frankfurter Handelsgeschichte*, II (Frankfurt, 1921), 73.
 - 16) Witzel, *a. a. O.*, 135 ff. ; Dietz, *a. a. O.*, 13 f., 251—271. 但し, 1562年以降も, 新毛織物工業の関係者が少数ながらも絶えず移住している。なお, ネーデルラント系亡命者の一部は, 周辺の農村は, オッフエンバッハ Offenbach, ボッケンハイム Bockenheim, レーデルハイム Rödelheim, グリースハイム Griesheim. ボーナメス Bonames に安住している。但し, その多くは, 農民となったのであり, 農村工業を移植した形跡はない。
 - 17) 絹工業の主要な分野は, 染色絹糸, 縫糸 Nähe-und Steppseide, リボン, 縁飾 Posament などであった。その大部分を支配したのは, 6~8人の縫糸商人を含む, 問屋商人で, その多くは, 自らの作業場をも所有していた。この他, 約20人余の独立の縁飾工が見られた。残余の大多数は, こうした問屋制前貸の支配下に入っていたが, フランクフルトのツunft規制は, ケルンと異なり市域外への発注を禁じていなかったから, ノイ・ハーナウやボッケンハイムなどの農村製縁飾 Landposamentier が, フランクフルトの家内縁飾工の工賃を圧下げていた。Dietz, *a. a. O.*, 293—7.
 - 18) 1594—1648年の間に, フランケンタールから35名, ノイ・ハーナウから27名, シェーナウ, オッテルブルク, ノイマルク Neunrark, ランプレヒトから6名の商人がフランクフルトに再移住しており, その中には, de Bary, Soreau, Vivier などの有力な商人が含まれる。Dietz, *a. a. O.*, 86 ff.
 - 19) Dietz., *a. a. O.*, 270 ; N. W. Posthumus, *De Geschiedenis van de Leidsche Lakenindustrie* ('s-Gravenhage, 1939), II, 123 ; H. Kellenbenz, "Wirtschaftsgeschichte Kölns im 16. und beginnenden 17. Jahrhundert", *Zwei Jahrhunderte Kölner Wirtschaft*, I (Köln, 1975), 377. 1608年および1613年のハ

- ーナウにおける工業従事者は、次の通りで、縁飾工が圧倒的に多い、縁飾工 *Pa-ssamentierer* 157, (126), ブーレット織 2 (2), ボンバジン織 3 (2), カッフア織 8 (5), 絹物商人 6 (6), その他の絹業従事者 25 (34), 合計 201 (179), 括弧内は 1613 年の数字。H. Koch, *a. a. O.*, 72, Anm. 1. これに対して, フランケンタールから移った呉組は, 1605 年当時 99 人, 1783 でさえ, 136 台の織機を稼働させていた。P. Koch, *a. a. O.*, 15.
- 20) H. Kellenbenz, *Unternehmerkräfte im Hamburger Spanien und Portugalhandel 1590—1625* (Hamburg, 1654), 179; Schilling, *a. a. O.*, 77—9.
- 21) H. van Asten, *a. a. O.*, 69—70; Bruckner, *a. a. O.*, 141 f., 275 f. cf. s. v. Hoesch, in *Neue Deutsche Biographie*. シェラー家は, 1458 年にベルク公国からアイフェル山地に移住して来た精錬業の一族, シュライヒャー家は, 1466 年 (ブルゴーニュ公シャルルのディナン破壊) 後アーヘンに移住した銅・真鍮製造業者の一族。
- 22) Kellenbenz, *Unternehmerkräfte*, passim. 1553 年に, ロンドンに逃れていたネーデルラント人カルヴィニストの一派がハンブルク移住を申入れた時, 市はこれを拒否しているが, それは, この地のルター派の指導者ヨアヒム・ヴェストファール Joachim Westphal がカルヴィニストとの間に激しい聖餐論争を展開していたためである。Schilling, *a. a. O.*, 122. なお, 毛織物商人のネーデルラント系商人の小売に対する抗議 (1588 年) は, *ebenda*, 103.
- 23) Kellenbenz, *Wirtschaftsgeschichte Kölns*, 370—95; H. Thimme, “Der Handel Kölns am Ende des 16. Jahrhunderts und die internationale Zusammensetzung der Kölner Kaufmannschaft”, *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, XXIX (1910), 389—473. ここでは, ポルトガル商人が香料貿易を, イタリア商人が生糸=毛織物の対イタリア貿易を牛耳っていたが, 次第に全ヨーロッパ的ネットワークを持つネーデルラント商人が, 優位を占めて行く。(毛織物取引についていうならば, ネーデルラント系商人は, 1593 年 609 梱をケルンから輸出したのに対し, イタリア系は, ピークの 1597 年にも, 34 梱に過ぎなかった。Kellenbenz, *a. a. O.*, 383) なお, ポルトガル系ユダヤ人のヒメネス家は, ケルンを去ってハンブルクに移った。
- 24) Dietz, *a. a. O.*, 39, 243 ff.; 1554—1600 年に移住して来た外国人商人 385 名 (フランス 16 名を含む) のうち毛織物は 40%, 30% が絹織物=生糸商人で, この他, 羊毛・麻織物などの商人も少数であるが含まれている。また 8% は, 宝石商で, 比較的大商人が多かった。

なおルター派商人として有名なのは, Scholier, von Bodeck, von Eden, Bode, Kaib などの金融業者, von Hilten などの絹物商, von Hensberg, von Cassel, Mertens, von Thal, Moors, Custodi などの宝石商や業種商 Materialist らであ

る。一方、カルヴィニストには、du Fay, Famars, Soreau, Neufville などの絹・毛織物商人が見出される。なお、付表ⅡDが示すように、1598年頃からネーデルラント系の高額納税者の数が旧市民に追付き、17世紀前半にはこれを大きく引離す。

- 25) B. Hagedorn, *Ostfrieslands Handel und Schiffahrt im 16. Jahrhundert* (Abhandlungen zur Verkehrs- und Seegeschichte, 3 u-6; Berlin, 1910/1912), I, 125 ff., 204 ff., 213 ff.; Schilling, *a. a. O.*, 66—9, 83 ff. 1554年に設立された、ワロン系亡命者のフランス語学校には、地元の上層家庭の子弟も通学していた。

Ⅳ

- 1) 但し、間接的には、南ドイツ（カルヴ等）やザクセン＝テューリンゲンの梳毛毛織物工業 Zeugmacherei の発展には、何等かの形で貢献しているものと考えられる。この点は、なお一層詳細な考証を要する。
- 2) フランドルの新毛織物工業の中心地である、ホントスホーテ Hondschoote. アルマンチエール Armentières, ポーペリンゲ Poperinghe, ニューケルケ Nieuwerkerke などは、いずれも法的には農村であったが、領邦君主から、新毛織物製造の特権 Vrijheid を与えられ、そして製品規格を中心とするギルド規制を布いていた。そして、これら農村工業の生産者達が、リールやイーブル、ブリュージュなどの特権都市からの誘いで移住する例も珍しくはなかった。従って、新毛織物工業の場合、都市工業と農村工業の関係がかなり流動的であったことに注意せねばならない。cf. Coornaert, *op. cit.*, pp. 37—8. 上記の点に関連して、カルヴィニストの農村工業の生産者達が常に営業の自由を志向していたのではなく、彼等の勢力が強力な所で、種々のツンフト規制が新たに施行されていることに注意すべきであろう。この点は、カルヴァン派を構成する社会層や教会組織との関連で、更に立入った検討を要する。
- 3) J. F. G. Goeters, “Die Rolle des Täufern in der Reformationsgeschichte des Niederrheins”, *Rheinische Vierteljahrsblätter*, XXIV (1959), 217—36.
- 4) カトリック勢力が圧倒的に優勢なライン地方では、プロテスタント（カルヴァン派やメンノー派のみならず、ルター派でさえも）は、たとえ許容されたとしても社会的にもまた公的にも種々の差別を受ける少数集団であり、教会を中心に信徒は家族間の結合を強めたのみならず、経済的活動においても、公式・非公式を問わず、非常に緊密な内集団をなし、時には、同族的合名会社さえ組織している。この特徴は、18世紀のみならず、産業革命後にさえ、ライン地方の繊維工業や製紙工業などプロテスタント系企業の多い分野に痕跡を残していた。cf. J. Hashagen, “Kalvinismus und Kapitalismus am Rhein”, *Schmollers Jahrbuch*, XLVII (1924), 49—72.

付 表

I 主要都市におけるネーデルラント人亡命者総数

	1567年以前	70年代	1585年以降
London	3000—3500 2 %	6000 3 %	10000 5 %
Frankfurt	2000 13%	1500 10%	4000 20%
Köln	—	1000—1500 2—3%	2000 5 %
Emden	2000—3000約40%	5000 50%近く	3000 30%
Wesel	500—1000	7000—8000 40%	4000 20%
Aachen	500—1000 5 %以下	3000 15%	4000 20%
Hamburg	—	1000	2000 5 %

Schilling, *a. a. O.*, 179.

II フランクフルト

A 市民権取得者* 1554—1561

フランドル	145
Armentières	11
Kemmel	18
Tourcoing	11
Tournai	48
エノー	104
Mons	10
Valenciennes	48
ブラバント	19
Antwerpen	9
アルトワ	9
リンブルク	24
リエージュ司教領	18
Verviers	14
ナミュール	8
Dinant	8
其の他	13
ネーデルラント合計	340

* この他フランス人（ロレーヌを含む）33名，スペイン人2，スイス人2，スコットランド1，不明41。

Witzel, *a. a. O.*, 139—141.

B ネーデルラント人職業調査* (1557年5月)

I	繊維工業		239
1.	毛織物		114
	サーイ織工	48	
	ホントスホーテ織工	4	
	ボンバジン織工	2	
	トリップ織工	5	
	カッフア織工	2	
	織元又は織布工	52	
	被毯織工	12	
	剪毛工	2	
	梳毛工	27	
	縮減工	1	
2.	麻・綿織物		11
	麻・バルヘント織工	11	
3.	絹織物		95
	縁飾り	95	
4.	その他		19
	染色工	6	
	刺しゅう工	1	
	仕立屋	12	
II	商人		18
III	その他の手工業		70
IV	木こり		4
V	日雇		11
VI	自由・専門職**		15
VII	不明		22
総 計			417

* 51名の雇職人7名の少年40名の少女を含む。但し、家族729は含まず。

** 牧師、教師、画家、医師、薬剤師、利子生活者。
Witzel, a. a. O., 144—5.

C ネーデルラント人商人出身地

年 代	1554	1554 1561	1562 1575	1576 1584	1585 1590	1591 1600	
地 域							
フランドル・エノー							
Valenciennes	—	16	6	13	12	6	175
Lille	—	5	8	3	6	4	
Tourcoing	—	1	4	—	—	2	
Armentières	—	1	3	1	1	—	
Tournai	1	15	6	7	6	7	
Mons	—	4	2	8	6	6	
Gent	—	4	1	1	2	—	
Brugge	1	—	1	—	—	2	
Nieuwkerke	—	—	1	1	—	—	
Kemmel	—	1	—	—	—	—	
ブラバント							
Brussel	—	1	1	3	1	—	21
Mechelen	—	—	5	1	—	3	
Breda	—	—	1	1	—	—	
Nivelles	—	3	1	—	—	—	
リエージュ・ナミュール・リンブルフ							
Maastricht	—	—	1	—	1	—	17
Weert	—	—	3	—	1	—	
Sittard	1	—	—	—	—	1	
Limbourg	—	1	—	—	—	1	
Liège-Namur	—	—	1	1	3	2	
北ネーデルラント							
Amsterdam	—	—	1	—	—	—	16
Delft	4	—	3	1	1	1	
Utrecht	—	—	1	—	2	—	
Zutphen	—	—	—	—	1	1	
アントワープ							
Antwerpen	1	7	26	20	66	20	140
合 計	8	59	76	61	108	57	369

出典: Dietz, a. a. O., 62.

D 直 接 税 納 税 者

年 次	ドイツ人		ネーデル ラント人		ユダヤ人		総 計	
	納税者	最高 等級	納税者	最高 等級	納税者	最高 等級	納税者	最高 等級
1556	2068	23	219	—	113	—	2400	23
1567	2223	35	200	2	133	2	2556	39
1578	2272	38	388	9	140	4	2800	51
1590	2280	40	600	24	220	5	3200	69
1598	2200	40	500	42	300	8	3000	90
1612	1600	40	300	60	380	18	2280	118
1618	1850	45	300	65	340	15	2470	125
1629	1480	50	300	76	360	14	2140	140
1648	940	37	160	45	340	5	1450	87

Dietz, a. a. O., 45.

Ⅲ ヴ ェ ー ゼ ル

A 出身地域 (1570~80年の在住者)

Vlaanderen, Hainaut	96
Brabant, Liège, Limbourg	112
Holland, Zeeland, Friesland, Drenthe, Overijssel	68
Gelderland	116
小 計	392
Ober-Geldern*	27

* 現ドイツ領の諸都市
Simons, a. a. O., 74.

B 職 業 (同上中判明せるもの)

商 人	135
ボンバジン織工	58
トリップ織工	47
縁 飾 工	42
乾 式 剪 毛 工	32
繊維工業関係 (職種不明)	48
合 計	362

Simons, a. a. O., 75.

C 検印料収入

トリップ

	6gg.	5a.	4h.
1547			
1549	11 "	6 "	4 "
1555	6 "	6½ "	
1556	12 "	22 "	
1570	22 "	23 "	
1575*	132 "	10½ "	
1576	250 "	7 "	
1578	134 "	12 "	
1579	98 "	8 "	
1580	118 "	1 "	

* 検印料倍に引上

ボンバジン

	44gg.	
1553		
1557	107 "	24a.
1563	236 "	4 "
1567	236 "	4 "
1568	375 "	12 "
1569	309 "	7 "
1570	292 "	10 "
1575	586 "	23 "
1580	1400 "	14 "
1585	930 "	2 "
1589	664 "	—

g = Gulden a = Albus h = Heller

Simons, a. a. O., 103, 105.

本稿は、昭和51年度科学研究費補助金（一般研究D 163029）による研究成果の一部である。